

ばならぬ場合が多く、又戦爆はそれ／＼速度がちがふため、一緒に航行するのが困難な爲であります。

第七章 夜間爆撃及び艦隊爆撃

一 夜間爆撃

夜間は暗黒の爲、空中戦闘が起らないのと、且つ編隊を作らうとしてもできない爲、爆撃機は不規則な集團か或は単機毎に行動するものであります。又夜間は目標が見にくい爲、晝間に比して、爆撃機は低空行動を必要とします。

然しながら、空中戦闘の顧慮が不要なる爲、低空から緩り目標を搜索することが出来、又単機行動なので必要な目標を一機宛に分配し得るの利があります。之が爲、「晝間は地域爆撃、夜間は精密爆撃」といふ方針の國もあります。佛國及び伊國等は専ら此の説を主張して居ります。一見矛盾のやうでありますが、此の理由からであります。

爆撃機が高い性能を必要とするのは、空中戦闘の爲であります。然るに夜間は空中戦闘が起らぬ爲、性能の劣等な爆撃機でも使用が出来ます。一般に戦役間は飛行機が急速に進歩するのが常例であるから一旦作つた爆撃機が間も無く舊式となることがあり得るものであります。それで此の舊式となつた爆撃機の消化法として、夜間爆撃が賞用せらるることがあります。又佛國及び昔の伊國の如く經費節約上、空中戦闘の出来ないやうな性能の劣等な重爆撃機を制定し、重爆撃機の出動は夜間のみと限定して居た國もあります。

夜間の航法は、晝間に比べると少しは熟練を要しますが、航法の進歩した今日では、左程むつかしいものではありません。又目標の発見及び爆撃照準も大都市とか、重要施設に對しては困難でなく、寧ろ空中戦闘の顧慮が不要である爲、沈着して操作が出来、低空行動が可能であるので照準誤差が少い等により、目標の種類によつては晝間よりも却つて爆撃が容易で正確に出来るものであります。

目標附近が燈火管制を行つて居ても、著明な目標であつて、豫めよく研究して行つ

た場合には投下照明彈の利用によつて、其の発見は十分可能であります。

又燈火管制地の上空を飛行する場合には、自分の飛行機の水平を知る爲の對比物が見えなくて、操縦に困難を感じることもあり、又照空燈で照射せられると、目がくらむことがあります。第一篇で述べました計器飛行の慣習をよくつけておき、外を見ぬやうにすれば、之等を防止することが出来ます。

以上によつて、夜間爆撃は十分に其の訓練さへ行つておけば、都市或は重要施設等に對しては、却つて晝間爆撃よりも有利に行ひ得るものであります。

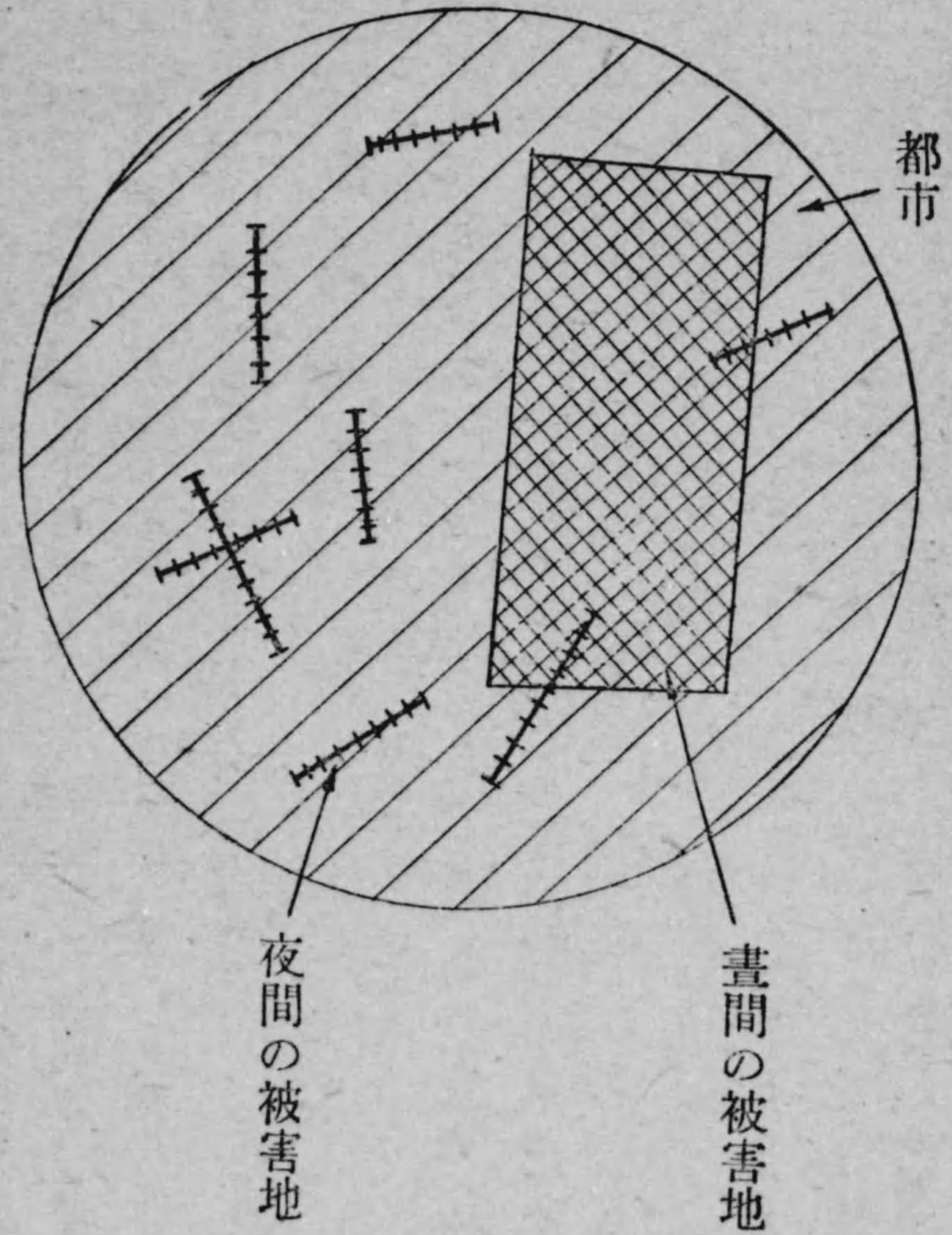
「ノモンハン」事件に於て敵の爆撃隊が、第一回に空襲して來たのは午前一時でありました。

防空上の注意

晝間は編隊一航過爆撃であるが爲、都市内の相當廣範な一局部が徹底的な被害を受け、且つ敵機は通り魔の如く航過しますから、危険は一瞬に來り、一瞬に去るものであります。夜間は多數の爆撃機が集團して來ても、目標の選定及び照準

第六十圖

都市内被害地の晝夜による差異



投下は各機毎であり、又時間的にも多少だらだらになります爲、晝間に比して小なる被害地が都市内の隨所に隨時に發生するものであります。之が爲、夜間の警防に當つては警防機關の分散使用が必要であり、且又常に敵の二番機以下によつて生ずる被害に應ずる餘力を存しておくことが必要であります。

二 艦船爆撃

艦船、特に新式主力艦を爆撃によつて轟沈させ得るか否かは、久しく外國の空軍及び海軍の疑問とした所でありまして、時稀沈んだものがあつても、それは偶然の不幸と稱し、大體に於て先づ沈まぬものと考へられてゐたのであります。然るに我が大日本帝國丈は、夙に主力艦と雖も爆撃により沈めなければならぬといふ決心と、沈め得るといふ十分なる自信とに満ち満ちて、來るべき時を待ち焦れてゐたのであります。

其の實現が、大東亞戰爭に於ける爆撃及び雷撃による、英米東洋艦隊の全滅であり

ます。

然し事此に至る迄には、華府會議以來、約二十年に亘る臥薪嘗膽ぐわしんせうたんの研究及び訓練と、事に當つての我空中勤務者の必死必殺の忠勇に因るものであつて、總ては我が大日本帝國獨得のものであります。

今を去る十九年前の關東大震災の餘燼よじんが未だ消え切らぬ大正十二年から十三年に亘つて、舊軍艦石見(舊名アリヨールといひバルチック艦隊の旗艦たりしもの)・舊軍艦津輕・舊驅逐艦初春等の幾多の戦歴ある惜しむべき艦艦まうせうが、軍艦爆撃の研究の犠牲とせられたのであります。

私は之等の研究に當つて、つねに陸軍側の研究委員長として參加しましたが、石見の愈々沈むときの光景——赤い腹を出して靜かに沈みゆくのを周圍の監的艦から登舷禮を行ひ「海行かば」の哀調を帯びた喇叭を奏しながら、此の不遇な軍艦の最期を見送つたことが、未だに眼前に髣髴はうふつとしてゐます。大東亞戦争に於て、我が航空部隊が敵艦を撃沈したとの勝報を聞く毎に此の悲壯なる光景を想ひ出します。

愈々石見の沈むとき、私共爆撃関係者は「宜しい之で自信を得た」といふ歡喜と希望に満ち満ちましたが、また一面「英米の畜生奴、今に手前等の艦隊を片端から此の通り撃沈してやるぞ」といふ憤慨の念がひくひくと沸いて來ました。見學の海軍將校中には涙をかくして、見るに忍びんといふ様子の人もありました。

英米の策謀たる華府會議の爲、生死を共にすべく誓つた我が乗艦を、我と我が弾で沈めねばならぬ海軍將校の悲憤。

然し、貴い犠牲となつた之等の艦靈も、今日の成果を照覽していと満足しながら、相模灣底深く、とこしへに安らかに眠つてゐることと存じます。

戦艦メーランド・航空母艦サラトガ・レキシントンなどは、其の當時からの我々の目標として研究し盡したものであります。

石見以下の試験は第一段の終了試験であり、之に基いて爆弾・信管・爆撃法等諸般に亘つて小改善を施し、愈々軍艦爆撃——主力艦、快速艦、吃水淺き驅逐艦類及び潜水艦等に區分し——の自信が充實したのであります。諸外國では、のんびりと机

沈 撃 圖 第六十一



上研究位で御茶を濁して居るのを尻目にして。

對艦用爆彈、同信管及び爆撃法は全く我が大日本帝國獨自獨得のものでありますが、この説明は時節柄避けることにします。

華府會議に次で、ロンドン會議に至り、益々我が海軍が英米の策謀に壓迫せられるより外、仕方のなかつた頃、當時濱松陸軍飛行學校高級教官であつた私は、爆彈の安全装置をはずして、敵主力艦に對し飛行機諸共に飛び込んで行く航空必死隊を同僚と共に提唱し、之を海軍當路者にも賛同を求めました所、「上司から命ずべきことではないが、海軍の空中勤務者は皆内心竊に其の決心を持ち、もう腹をさめて居る。」と、しんみりと申されました。

今日、大東亞戰爭に當つて、豫め信管の安全装置を除去し、敵主力艦の煙突を目がけて自爆を行はれたのは、既に十數年前からの決心であり傳統なのであります。

第八章 爆撃隊 魂

一 不撓不屈勇往邁進

爆撃隊は出動すれば、必ず空地兩方面の敵から、激烈な反撃を受けるものであります。又航続距離の長い爲、各種の天候上の障碍も受けるのは當然であります。如何なる困難に遭遇しても、或ば僚機が火の塊になつて、次から次へと撃墜せられ、只自分一機になつても、不撓不屈只與へられた目標へとどこ迄も邁進すべきものであります。如何に優勢な敵に對しても、只管攻撃の一點張りといふ戦闘隊魂は、動的勇猛心でありまして、爆撃隊の不撓不屈は、恰も文覺上人が何回假死の状態に陥つても、當初に決心した二十一日間寒中の那智の瀧壺に座禪を組み通したと同じであり、又近頃の日本人の覺悟たる「何が何でも勝ち抜くぞ」といふのと同じ精神であります。

二 只任務を之重しとす

實際爆撃に行つた場合、一番心配なのは「目標がうまく見附からなかつたら、どうしようか。」(戦場の移動性目標に就ては特に然りであります)。「どうぞ爆弾がうまく當るやうに。」といふ之以外何事をも考へません。之がほんとの戦であるといふことも、生死といふことも全く頭に及びません。

高射砲弾が前後左右に炸裂して居ても、何とも感ぜないのみならず、自分の飛行機の爆音に妨げられて炸音は聞えませんが、時折、眼の前で白い炸煙が立つのを見て始めて撃たれて居ることがわかり、地上を見ると方々に高射砲發射時の閃光が澤山見えます。同乗者相顧みて閃光の方を指し「やつて居りますな。」「うん大分にやつとる。」と微笑する、只之丈けです。

戦闘機が襲ひ來つても、演習の時と同じ氣持であり、時には永年の飛行學校教官氣分が出て、我を襲ひ來る敵の戦闘機の行動を見て、「あの急降下の舵の使ひ方が少し

荒すぎるぞ」などと、丸で學生に對する講評眼を以て見て居ることすらあります。斯かる中に時とすると、僚機が黒煙を吐いて急降下しながら墜落することがあります。數年後に至つても愛しい部下を死なせたときの光景を屢々夢にまで見ますが、此の時は「あ、何番機がやられたな」と、心の中で默禱をして居る丈けであり、只頭の中は「目標が見附かつてくれるように」「爆弾がよく當つてくれるように」と之で一ぱいであります。

只、任これ重しとするの一念之亦爆撃隊魂の一であります。

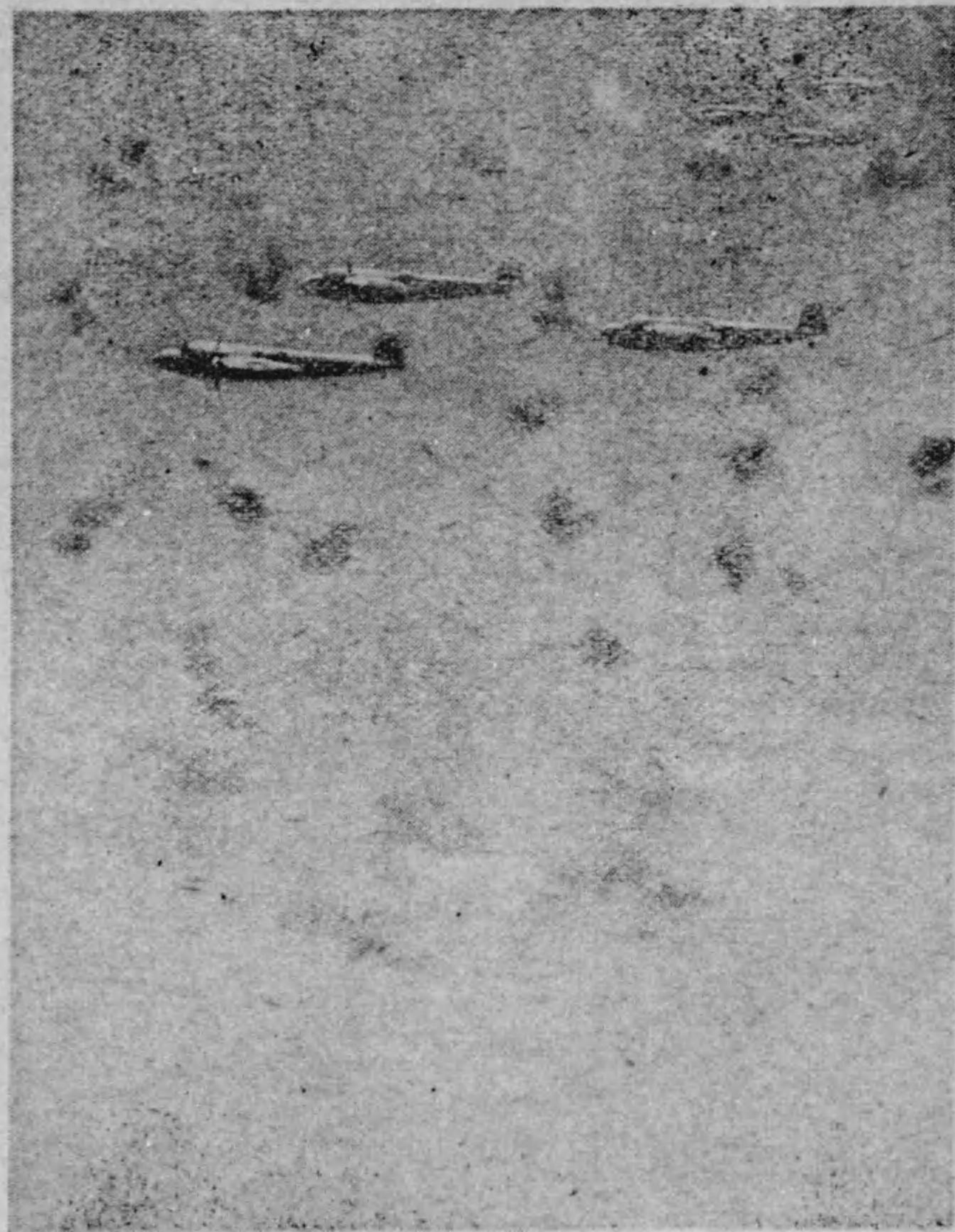
三 必死必殺挺身肉薄

「自分は此の爆撃行に於て必ず死す。其の代りに完全に敵に止めを刺してしまふぞ」といふ決心、之を必死必殺といひます。

講談師の御話にあります、昔劍聖某がまだ刀の持方一つ知らぬ農家の子供時代に、或劍術の先生と眞劍仕合をどうしてもしなければならなくなつた爲、どうせ殺され

第六十二圖

「だいぶんやつてますな」
「うんやつとるハハハ」



るのであるから、相手と相撃して死ぬといふ決心と、動作を執つた所が相手の劍術の先生は此の必死必殺の心持ちと、構へを見て恐しくなり、顔を眞蒼にして、刀を放げ出して此の子供に陳謝したといふことであります。

世の中に必死必殺位強いものはなく、又成功間違ひないものはありません。

「俺の一身と敵主力艦一隻と相撃する」といふ決心及び動作によつて、從來爆撃では沈まぬと外國で稱せられて居た、近代主力艦を片端から撃沈して居られるのであります。我が爆撃隊の空中勤務者は、悉く爆弾三勇士であり、九軍神であることを期して居られるのであります。

四 上下一心と獨斷專行

獨斷專行とは、自分勝手な行動を行ふものでなく、上官の腹の底迄もよく推測し、其の考へに副ふやうに、機宜の處置をとることでありませす。

爆撃隊は目標が遠く、航続時間が永い爲、高級指官揮より命令受領後の敵狀の變化、

天候氣象の急變等の爲、空中勤務者が獨斷專行せねばならぬ場合が往々生じます。又一編隊内に於ても、編隊長機が墜されたならば、直ちに二番機が之に代り、其の二番機が故障が出来たならば、直ちに三番機が之に代つて任務の遂行を行はねばならぬものであります。

而して獨斷專行を行ふ爲には、上下一心、特に下級者は上官の腹の底迄も呑み込んで居らないと、機宜に適した行動はとれないものであります。

五 協同一致、團結

爆撃編隊は、一編隊は全々一心同體のものであり、又其の空中戦闘に方つては、敵機が自分の飛行機に襲ひ掛つて來ても、必ずしも之を射撃することなく、編隊全般の安危上必要な方面に射撃を集中すべきものであることは、既に申し述べた所であります。

極めて短時間の戦闘間に、しかも命令指示も受けることなく、自然と此の動作にな

ることは編隊内各人が心の底から一致團結して居らぬと出来ないものであります。戦闘はいつでも協同一致、寧ろ友軍の爲、友軍の爲、と行動することによつて全般的成果を挙げ得られるもので、萬世一系の皇室を奉戴せる大日本臣民にして、始めて心から之が出来る所でありまして、日本軍の強味は此にあり、寄合世帯、個人主義の英米の弱味は此に在ります。

むすび

必ず勝つといふ堅き信念は、戦争全般に就ても又戦闘に於ても、戦士も銃後の人も是非共必要なことと存じますが、敵を侮るの念は恐るべき結果を生ずると共に、勝ち抜くぞといふ掛聲丈けでは決して勝ち抜けません。

支那事變及び大東亞戦争に於ける、我が陸海空軍の世界始まつてからの未だ曾てない赫々たる戦果も、決して相手が無暗に弱いものではありません。もとより、我が戦士も決して赤ん坊の手を捻るやうに樂々と戦うて居るものではありません。皇祖皇宗の神靈の御加護と、天皇陛下の御稜威に基くことは申すまでもありませんが、空中戦闘では敵の顔が見える迄、必死必殺の肉薄攻撃を行ひ、爆撃では信管の安全装置を除去して敵主力艦に飛び込み自爆を行ひ、又爆弾を有しない偵察機は空中から敵情を無線報告した後、敵の軍司令部の自動車目がけて衝突に行くといふやうな戦

闘法であればこそ敵を壓服殲滅しつつあるのであります。此の精神、此の技能は、實に二十數年に亘つて、今日あるを期して孜々營々として培はれたるものであります。

戦争の進捗に伴ない平時から練成せられる戦士が、だん／＼減つていく爲、軍隊の素質が逐次遞下するのは各國各兵種止むを得ない所とせられて居りますが、特に養成に永年掛る空中勤務者に於てはさうでありまして、戦争毎に各國の最も苦しむ問題は之であります。

大東亞建設の偉業は、決して短時日に終るとは思へません。今の青少年諸君は次の時代の人ではなく近く最も優秀なる戦士として、大東亞戦争に参加する光榮と希望とに満々たるべき人々と存じます。

今の空中戦士の育成には、相當年月を掛け得られたのでありますが、皆様は極めて短い時日内に此の精神、此の技術を習得し、過去二十年以上に亘つて養はれたる我空軍魂の傳統を承けついで、彌が上にも之を擴大強化せねばならぬ責任のある人々

であります。

爆撃は空軍の最大威力であります。而して皆様が豫め爆撃を理解し、つねに爆撃隊魂の練成に自ら努められることは、やがて國家の爲に大きな貢獻をすることになります。切に皆様の御自重と御奮起とを希つて止みません。

(出文協承認)
ア 80015



昭和十七年十一月十日初版印刷
昭和十七年十一月十五日初版發行
(七〇〇〇部)

著者

柴田眞三朗

發行者

岡本政治

印刷者

井下精一郎

發行所 增進堂

本店 大阪市西區新町南通三ノ四八
電話新町(53)三二一四番
支店 東京市神田區神保町一ノ五九

定價一圓五十錢
送料十六錢

配給元 日本出版配給株式會社

録目・書選年少青

湯川念三著	航空の知識	飛行機は勿論、發動機、風洞、氣流、航空燈臺と、あらゆる航空に関する常識を網羅した航空日本の青少年必讀の書である。	定料 一圓三十錢
陸軍航空兵大佐 柴田眞三朗著	空中戰鬥の話	大陸の、又南方の空で華々しい活躍をしてゐる空軍の戰鬥法は？素敵な挿畫が豊富です。	定料 一圓三十錢
工學士 藤田靜太郎著	發動機の話	發動機は文明人ときつても切れぬ仲で、高度國防國家に於る最大の關心事である。擬人體・講演體・對話體に説明した書である。	定料 一圓五十錢
陸軍航空兵大佐 柴田眞三朗著	爆撃の話	未だかつてあらはれなかつた爆撃の基礎知識・國民常識の書です。ありふれた書と異り爆撃の實際を目の邊り見るやうです。	定料 一圓五十錢
勝崎猪之助著	動物の話	あなた方は毎日いく／＼の動物を見て知つてゐますね。でも正しい知識を持つてゐるでせうか本書はそれ等を面白く親切に説明してゐます。	定料 一圓五十錢
陸軍航空兵大佐 柴田眞三朗著	空軍物語		定料 一圓五十錢
中田房雄著	貨幣の話		定料 一圓五十錢

近刊



17. 12. 7

